

モルディブ共和国における体育教育とそれに対する国際協力活動の現状と課題

—スポーツと開発の在り方に着目して—

教科・領域教育専攻

国際教育コース

仁木博子

指導教員 石坂広樹

本稿の研究目的は以下のとおりである。第一に、モルディブのカリキュラムにおける特徴や課題、授業での活用の実態について明らかにすることである。第二に、モルディブの体育に係る実態として授業実践や体育教育の意義、課題を探ることである。第三に、モルディブにおける体育教育に関する JICA の国際協力活動において、「開発におけるスポーツ」がどの程度達成されたかについて検討することである。

第一章では、「Sport for Tomorrow」政策により気運が高まった我が国のスポーツにおける国際協力について概括するとともに、モルディブが国際スポーツ大会の開催に向けてスポーツへの兆しが高まっていることについて述べた。また、カリキュラムは最低限順守すべき「教育の枠組み」として多くの国で位置づけられているが、必ずしもカリキュラムと学校現場が一貫した状況ではない国があることから、カリキュラムの視点から学校現場の課題を分析することの有効性を示した。

第二章では、スポーツの力について先行研究をもとに論じた。スポーツには多様な力があり、プラスの側面として「人間開発」・「社会開発」に貢献し得る力を有することから多くの国際協力の現場で活用されてきた。しかし、スポーツが発展する過程に様々な負の側面を生み出し、国際協力の現場においてもたかひの構造の生起や日本型体育輸出による現地の実態とのギャッ

プの生起など、マイナスの問題が露呈した。

第三章では、これまでの日本の体育・スポーツにおける国際協力について分析し、「スポーツ」と「開発」の関係性を再考する中で、これまで「スポーツを通じた開発」を中心に、スポーツを手段として社会的諸課題の解決に向けた協力活動が行われてきたことが明らかになった。しかし、スポーツを手段とした開発では、現地のニーズと援助側の間でギャップが生じること、一時的な援助となり現地に根づかないことなどの問題が生じた。スポーツそのものの発展と社会的諸課題の解決に向けた側面の両方から調和のとれた、バランスのよい開発を促進していくためにも、「開発におけるスポーツ」の視点に立った協力が重要となるであろう。

第四章では、本稿の理論的枠組みを示した。先行研究をもとにスポーツの力、カリキュラムの在り方、開発におけるスポーツについて理論的検討を行った。実証的検討として上記の理論的検討とインタビュー・アンケートデータから国際協力としてのボランティアの現場を振り返り、モルディブに着目して体育のカリキュラムや体育実践の現状、今後の在り方を分析することを本研究の理論的枠組みとして定めた。調査は、2020年3月までモルディブで青年海外協力隊として活動していた隊員6名にインタビュー、1名にアンケート調査を行った。

第五章では、日本とモルディブのカリキュラム分析を行った。モルディブでは生涯健康に生

活するために必要な知識や技能を身に付けることが体育の目標として示されており、健康のために身体活動に参加することを重視している。そのために必要な知識や技能を習得し、育成することを指導内容としている。一方で、日本は生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現・継続を目標に、生活を豊かにするものとして体育・スポーツを位置づけている。1、2 学年での遊びを中心とした易しい運動から、発達段階に応じて規則やルールを工夫させて発展し、競技スポーツに移行している点が内容の特徴である。

第六章では、インタビュー・アンケートデータを SCAT により分析した結果と考察を示した。カリキュラムと現地の実態については大きな相違があり、未着手の教員も多いことから、体育教育への問題意識がない低い状態にあることが想定される。体育授業を担当したすべての隊員が子どもの実態とカリキュラムの内容項目にギャップを感じており、発達段階に不適切な高度な項目となっている。その要因として、用具や環境などのハード面、子どもの実態を十分に理解していない専門の指導者により作成されたカリキュラムなどが挙げられる。体育を自由時間と認識している教員が多く、隊員を一教員と認識している点からも、自分たちで体育の授業をする意識はなく、誰かしてくれる人が来たらその人に任せておけばいいという考えのもと、体育が軽視されている傾向にある。

第七章では、これまでの分析により得られた教育現場の現状や課題に鑑み、体育教育の普及・振興に向けた提案を示した。そこで、体育に関するワークショップの定期的な実施や、スポーツイベントの開催により、体育・スポーツのもつ多様な可能性を教員自身に体感してもらい、体育・スポーツの教育的な有用性を実感してもらうことを挙げた。また、カリキュラムに基づき年間指導計画を作成することの有効性を挙げている。そうすることで、豊富な運動経験を保

障し、質の高い体育授業を行うことが、正の連鎖となり、生涯にわたり運動に参画する子どもを育成するとともに、モルディブにおける体育教育の普及・発展が見込めるであろう。

第八章では本論文の結論を示している。生涯にわたる健康のために体育を位置づけているが、学校現場でのカリキュラムの活用には大きな相違があり、カリキュラムに沿った授業の実施には教員の知識不足や現地の実態に不適切な内容項目といったソフト面とハード面に関する課題を有している。

各学校によって体育授業の実態は異なるが、体育の必要性を十分に感じておらず、形式上授業として体を動かす時間はあるが、教員は用具を渡して放置したり他の授業のための補填時間にしたりなど、軽視している傾向にある。教育的価値の低い授業が連鎖して授業が改善されず、子どもがただ自由に遊ぶだけの時間となっているため、活動内容も制限され豊富な運動経験ができていない。現地教員が体育の必要性を心から感じ、変革に向けて主体的に動き出す糸口を隊員が創り出していくことが鍵となるであろう。

モルディブの体育における JICA の国際協力は、これまで「スポーツを通じた開発」の体育科教育支援に行われており、スポーツそのものの開発は限定的なようである。「スポーツを通じた開発」を行うには「スポーツの開発」が十分に行われていることが前提であるが、ソフト面ハード面共にスポーツ自体の課題が山積している。体育・スポーツそのものを普及させていくには、現地に根ざした体育・スポーツの在り方を住民との協働により見出し、現地の主体性を促進しながら支援していくことが重要である。さらには、「開発におけるスポーツ」の軸に立ち、体育・スポーツそのものの発展を目指すとともに、体育・スポーツが社会的諸課題の解決においても貢献できるよう、双方の側面からバランスをとり、推進していくことが必要であろう。